

滴一滴

相談に来るがん患者が口にするのは、再発の不安が多いという。「心配するのは1日1時間でいい」。応対する医師の樋野興夫・順天堂大学教授は、そんな心の持ち方を勧める。岡山市内で先日行った講演で語った▼患者との対話の場として「がん哲学外来」を2008年から開いている。正式な診療ではないが、面談者はこれまで3千人に上る。目的は悩みを解決するより、解消すること。そのために、生活の中で没頭できる趣味などを探すように説く▼哲学外来より2年早くできたのが、がん対策の充実を目指した「がん対策基本法」である。今月で成立から10年になる▼今や日本人の2人に1人は一生に一度はがんを患うが、治癒の目安である5年生存率は6割近くに上昇した。慢性病として長く付き合う患者も多い▼そんな病とどう向き合うか。法律に基づく国の計画は施策の一つに、子どもへのがん教育の推進を掲げる。「予防の大切さだけでなく、がんになった場合の心構えも教えないと」。子ども向けの講師も務める樋野さんは注文する▼哲学外来と並んで提唱しているのが、患者同士が思いを語り合うカフェである。岡山県内は瀬戸内市などで開かれ、岡山市内でも9月、新たに始まるという。「病気であっても病人らしくはならないで」。樋野さんのそんな勧めも実践できたらいい。